「コロナ禍」のオンライン教育とコミュニケーション*

CEGLOC センター長　臼　山　利　信

全人類にとって2020年は、新型コロナウイルスに始まり、新型コロナウイルスに終わったと言ってもよい。未曾有の年だ。ワクチンも治療薬もないウイルスの脅威。肉眼ではまったく見えない。周知のように、感染して重篤化すれば肺炎などで命を落とすこともある。呼吸器系が弱いわたしにとっては、生命の危険を意識せざるを得ない。

感染リスクを確実に下げる方法は、移動の自由を制限し、他者との接触を完全に避けること。それができれば何も苦労はしない。とにかく３密を避けながら、他者との接触を可能な限り控え、自身の活動を抑えるしかない。この行動は、知らず知らずのうちに心と体に想像以上の負荷をかける。

コロナ禍の収束を見通せないまま、CEGLOC 開設科目の授業は、春学期も秋学期もすべてオンラインになった。４月１日に清水諭教育担当副学長名で、すべての授業のオンライン化が通知されたことを受けて、授業開始が延期された４月 27 日までのわずか４週間弱の間に、CEGLOC や人文学類の有志の教員等がボランティアで授業担当教員に対してオンライン授業研修を実施した。[1] 研修を行う側も受ける側も一致団結し、必死に事態に対応した結果、奇跡的にオンライン授業がスタートした。

教員にとって、緊急時のオンライン教育は初めての経験である。特に春学期の授業は、大きな困難を伴う試行錯誤の連続だったと思われる。だが、秋学期については、春学期のオンライン授業の経験から得た知見と課題を活用することで、教育活動としての質と負担が相対的に改善されたと感じる。当初は、オンライン授業を準備し行うことで精一杯だったが、夏期休暇期間を経て心に余裕ができ、秋学期には自身のオンライン授業の振り返りが冷静にできるようになった。

その結果、オンライン教育のプラス面とマイナス面が浮かび上がってきた。例えば、プラス面は、①複数のデジタルコンテンツ（スライド、動画、テキスト、文献資料、インターネットなど）を有機的かつダイナミックに活用した双方向の授業が展開できること、②教員と学生とを問わず、物理的な距離・場所・時間に拘束されない授業ができること、③通学やキャンパス内移動に係る肉体的負担が大きく軽減されたことなどを挙げることができる。一方、マイナス面は、❶ペーパー試験を行えず公正な成績評価を行う方法が制限されたこと、❷図書館などの利用や実習的な活動が大きく制限されたこと、❸教育活動を通じた学生間、教員と学生の間の人間関係づくりが著しく阻害されたことなどを指摘できる。

1　緊急事態下において、CEGLOC 全体、各部門（外国語教育、日本語教育、国語）のオンライン授業化に、献身的にご尽力いただいた小野雄一教授、関崎博紀准教授、田川拓海助教、土井裕人助教、猪股無限特任研究員に対して、記して衷心より厚く御礼を申し上げます。また、外国語教育部門長の久保田章先生、日本語教育部門長の小野正樹先生、国語部門の石塚修先生には、１年間を通して、それぞれの部門の教育活動を混乱なく堅実に運営していただいたことに対して、心から深謝申し上げます。

長短の両面が浮き彫りになったが、わたし自身がオンライン教育の現場で最も強く感じたのは、2年次生以上の学群生はすでにコロナ禍以前に構築したヒューマンネットワークをフル活用していち早く心理的な危機を乗り越えていたのに対して、そうした助け合いができる身近なネットワーク基盤を持たない新入生の苦しみと重圧は想像を超える大きさだったということである。友だちをつくる機会もなく、授業中気軽に話せる相手もいない。生活相談のできる先輩もいない。レポートを助言し合いながら一緒に作成する仲間もいない。コロナ禍の孤立した環境で懸命に学業に打ち込んだ新入生たちの姿が目に浮かんでくる。

年が明けた令和3年の最初の「基礎ロシア語 AII」の授業で、これまでの8ヶ月間のオンライン教育について、1年生一人一人に尋ねてみた。オンラインばかりの授業に疲れ切り、学修に対する意欲を失っているのではないか心配したからだ。しかし、この授業の学生たちについては杞憂だったことが判明した。6月の段階で自ら連絡を取って希望のサークルに入部を果たし、すでにバリバリと活動している者、数少ない対面授業である体育の授業で積極的に声を掛けて友人をつくった者。2年次生のクラス代表の学生たちやクラス担任の先生方などの温かいサポートを受けながら難局を乗り越えた者。高校時代の友人と励まし合って何とかここまで耐えてきた者。意外にも、学生たちは「苦労はしたけれど、オンライン教育環境に適応できたので、来春もオンラインでスタートしても大丈夫だ」と語った（実際には、こうした学生たちばかりではなく、オンラインによる授業形態に馴染めず、苦悩し続ける学生も少なからずいると思う）。しかし「来秋もオンラインというのはさすがに嫌だ」と一様に主張した。

人間は社会的存在である。人とのつながりなしに生きていくことはできない。オンラインでも人とのつながりを保つことは可能だ。しかし、オンラインによるコミュニケーションには、例えば、対面授業の際に自身の五感で感じる、授業に参加した全員の存在感とその相互作用から発せられる、言わば脳の中枢に直接的に伝わるある種の「質感」（ここでは「教室内の空気感」と言い換えても良い）の欠如が常につきまとう。この「質感」のなさこそが、オンラインコミュニケーションで感じる物足りなさの正体だと思う。昨年度まで当たり前だと思っていた対面授業という形態が大学教育の現場でいかに大切であり、特に言語教育においてどれほど高い教育効果を発揮してきた形態であったかということを、今まさにオンライン授業との比較を通して痛切に感じている。

COVID-19のパンデミックの終息には後数年かかるとも言われる。アメリカ、イギリス、ロシア、中国などで開発されたワクチン接種が本格化していく過程で、社会的な活動制限の範囲が徐々に解除されていくものと推測される。

アフターパンデミックの世界が、人間のコミュニケーションのあり方を大きく変えることは間違いないと思う。認知の「質感」を伴うオンサイトコミュニケーションの意義や機能が再確認、再認識されるだろう。そこではこれまで以上に「つながり」、「絆」、「思いやり」といった人に寄り添う気持ちや助け合いの精神、すなわち、他者（コミュニケーション参加者）への「共感力 empathy」が重要視され、それが行き交うさまざまなオンサイトコミュニケーションの場が形成され展開されていくのではないか。

一方、オンラインコミュニケーションの可能性はさらに広がっていくだろう。特にわたしたち大学教員が関係する、日本と世界の高等教育段階の教育形態が平時のオンライン教育の導入により大きく変貌するだろう。具体的には、通常のオンサイト教育とオンデマンド型・同時双方向型のオンライン教育に加えて、少なくとも以下の７つの可能性がある。[2]

①**オンライン学内連携教育**：例．学群・学類間の授業交流（FD 活動としてのオンライン授業見学、オンラインゼミ交流）等

②**オンライン国内大学連携教育**：例．キャンパスウィズキャンパス（CwC）[3]連携講座（筑波大学と ICU）、県内大学連携講座（筑波大学、茨城大学、茨城県立医療大学）、国内大学連携講座（筑波大学と A 大学、筑波大学と B 大学など）、大学間ゼミ交流（筑波大学臼山ゼミと A 大学 X ゼミの合同授業）等

③**オンライン国際大学連携教育**：例．人文社会科学連携講座（日本とロシア　筑波大学、モスクワ大学、ノヴォシビルスク大学）、生命環境学連携講座（日本とカザフスタン　筑波大学、カザフ国立大学、ユーラシア国立大学）、国際開発学連携講座（日本と米国と国際機関　筑波大学、ピッツバーグ大学、ユネスコ）等

④**オンライン留学**[4]：例．キャンパスインキャンパス（CiC）[5]（カザフ国立大学、台湾大学等）、オンラインデュアルデグリープログラム等

⑤**オンラインインクルーシブ教育**：例．障害学生の教育に効果のあるオンライン教育・

2　ロシア留学中にコロナ禍の影響を受け、2020 年２～４月に中途で帰国した筑波大生たちが、留学先のロシアの大学のご厚意で 2020 年４月以降も引き続きオンライン授業を受け、ロシア語学習や国際政治などの専門科目の履修を続けることができた。この「オンライン留学」ともいうべき学生たちの経験と、筑波大学でロシア語の授業をオンラインで行った教員の経験について、新たな教育形態の可能性という観点から整理・検討するためのラウンド・テーブルを５回行った。ここで提示した７つの可能性は、このラウンド・テーブルでの議論と考察を得て明らかになったものである。ラウンド・テーブルの内容は、以下の報告書として刊行され、ホームページ上で公開されている。

『NipCA プロジェクト主催 オンライン留学に関するラウンド・テーブル～コロナ禍の困難から見出す新しい教育の可能性～』（筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」、グローバルコミュニケーション教育センター、グローバル・コモンズ機構、2020 年９月）

https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/publication/other_publications/3562

3　国内の自身の大学とその連携先の国内の大学で、双方の学生が正規の授業を履修して単位を取得できるしくみで、Campus-with-Campus と名付けられている。2016 年４月６日に筑波大学と国際基督教大学（ICU）が Campus-with-Campus の内容を主眼とした協定を締結した。

4　オンライン留学とは、在外の（協定校の）学生に正規の学籍を与え、オンラインで、教養教育（外国語を含む）や専門教育、さらに非日常体験的な要素（何らかの「現地」体験：例えば、日本的なるもの、ロシア的なるものといった現地的なるもの）を含む教育活動を提供する遠隔教育である。この定義は、2020 年度日本ロシア語教育研究会研究集会（2020 年 12 月６日、オンライン開催）で、筆者を中心とする筑波大学の研究者が「コロナ禍のロシア語オンライン教育から新たな教育形態の可能性を探る」（臼山利信、加藤百合、BOITSOV Ivan、梶山祐治、笹山啓、山本祐規子）の題目で共同発表した内容から抜粋したものである。

5　Campus-in-Campus と命名された、国内の自身の大学とその連携先の海外の大学で、双方の学生が正規の授業を履修して単位を取得できるしくみで、筑波大学が先導し創出した国際連携教育制度である。現在、世界の 10 大学と Campus-in-Campus 協定を締結している。

https://www.tsukuba.ac.jp/en/academics/top-global-campus/partnerships-cic/index.html

学修のあり方の共同研究、世界唯一のろう・難聴学生のための liberal arts 大学であるアメリカ・ギャロット大学（ワシントン）とのオンライン教育研究交流等

⑥**オンラインリカレント教育**：例．社会人対象のオンライン教育の整備・拡充の可能性（通信教育課程設置の基盤）等

⑦**オンライン教職員研修**：例．国内外の有識者による研修会、オンライン国際化教育（英語、初修外国語等のオンデマンド提供）等

令和３年度は本学第３期中期目標・中期計画の最終年度に当たる。令和４年度からは第４期中期目標・中期計画がスタートする。CEGLOC としての大きな方向性は、大学の要請、学生の要請、そして社会の要請に応える言語教育、すなわち、共通科目教育等を通じて、①アカデミックスキルを高める言語教育、②キャリア支援としての実践的な言語教育、を戦略的に推進していくことである。より具体的には、a）教育研究の英語化、b）留学生のための日本語教育の充実・拡大、c）日本人学生の国語力の強化、d）グローバル人材を育成するためのトライリンガル教育の充実・強化、の４つを着実に後押ししていくことである。

CEGLOC は、上記の７つの可能性を念頭に置いて、アフターコロナという新しい社会的文脈の中で、オンサイト教育とオンライン教育を適切に組み合わせた、指定国立大学である筑波大学にふさわしい、世界基準の言語教育の構築を目指していくことになると考えている。

＊本エッセイは、CEGLOC 外国語教育部門の『外国語教育論集』（第 43 号、2021）に掲載されている巻頭エッセイと同一の内容である。